



安曇野ちひろ美術館

美術館だより

No.57

2009.7.10

ちひろの四季

●2009年7月10日(金)～9月8日(火)

春の生命の芽吹き、夏の光り輝く海辺、秋風に舞う木の葉、冬に散る雪の美しさ……。いわさきちひろは、心に感じた四季の移り変わりを、自然と戯れる子どもたちの姿とともに、美しい色彩と伸びやかな筆づかいで表現しています。

夏の絵本『ぼちのきたうみ』

「芝生のむこうに海の見える美しいところで、私はこの絵本を描きました」*1。

海に遊びにきた少女ちいちゃんと、飼った犬のぼちをめぐる、ささやかなエピソードを描いた『ぼちのきたうみ』。自分の幼い頃の愛称でもある「ちいちゃん」という少女を主人公にしたこの絵本を、ちひろは、1973年に海沿いの丘の上にある熱海ホテルで制作しています。

「絵本全体を一枚の絵とする見方」*2を意識して作られたこの絵本には、うれしさ、さみしさ、戸惑いといった、少女の心の動きとともに、時の経過によってさまざまに表情を変える海辺の情景が、全編を通じ写し出されています。

真黒に日焼けした男の子が少女を泳ぎに誘う、中盤のシーン(図1)。ちひろは、基調の青に紫や緑をさして色を重ね、筆のかすれやにじみを自在に使って、海の複雑な色合いや波の形を、繊細に表現しています。彩度の高い青と波間の白とが織りなすコントラストは、日中の海の輝きとともに、青い空と白い砂浜の果てしない広がりを伝えています。光や風、潮の香りをちひろ自身が肌で感じ描き出したであろう光景は、波音までが

聞こえてきそうなほど生き生きとした表情を見せています。

預けたぼちが来るまで海で泳がないと決めたちいちゃん。小犬に宛て少女が手紙を書く場面(図2)では、夕暮れ時の海と空の表情の変化が、筆の勢いと色彩の対比とでダイナミックに捉えられています。太い筆をすばやく水平に走らせ、鮮やかな朱色と青、地色の白で表現された、雄大な自然の情景。水で色を抜き取るようにして、夕焼けのなかにかたどられた後姿からは、ぼちがいなくてさみしく思う、少女の想いが浮かびあがります。

季節を伝える一雑誌、カレンダーの仕事

ちひろは、1963年春から最晩年までの12年間、月刊誌「子どものしあわせ」の表紙絵の仕事を手がけていました。子どもが題材であることを条件に、デザインも含めて全てちひろのセンスに任せたいという出版社の要望に対し、現代的な、自分が本当に美しいと思う表紙を作ろうと、ちひろは意欲的に制作に打ち込みます。月1作のペースで書き続けられた表紙絵には、カラー印刷に移行した1969年5月以降は特に、季節の移ろいを水彩で情感豊かに捉えた、後にちひろの代表作と称されるような作品群が並びました。折々の自然の変化を深く感じ取ったちひろは、草花が生え、朽ち、再び芽を出すあるがままの姿に美しさを見出して、目に映る色にとらわれず、透明感のある色彩の世界を作り出しています(図3・4)。

また、同じくちひろが四季を描いた代

表的な仕事として、カレンダーもあげられます。「貝がらと青い帽子と少年」(図5)の背景に塗り残された紙の白さは、周囲に広がる海のきらめきや、真夏の焼けつく陽射しの様まで物語っています。

絵のなかの四季

若い頃、画家の丸木俊が主宰するデッサン会に通い、対象をそのまま写すのではなく、一番印象の強いところから描き始めようと教わったちひろ。デッサンで培った観察眼で、四季に応じて対象が見せる最も美しい瞬間を心に捉え、みずみずしい色彩と的確な造形で、感じるままに表現しました。

日本の高度経済成長期にあたった1972年、ちひろは、「どんどん経済が成長してきたその代償に、人間は心の豊かさをだんだん失ってしまうんじゃないかと思います。……私は私の絵本のなかで、いまの日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています」*3と語っています。ちひろの絵には、身近な自然のなかにあるやさしい光や風があふれており、何気なく描かれた草木や花々にも、生命力が満ちています。絵のなかに自由に心を遊ばせるとき、見る人は、日々の暮らしのなかにあるやさしさや美しさ、豊かさを、再発見できるのかもしれません。(屋代亜由)

*1 いわさきちひろ『ぼちのきたうみ』1974年

*2 武市八十雄『絵本の世界』をささえたもの』1976年

*3 いわさきちひろ「(対談)今だからこそ失わないほしい」1972年

●展示室4

出版記念 アンドレア・ペトルリック・フセイノヴィッチ展

●2009年7月10日(金)～9月8日(火)

クロアチアの女性絵本画家アンドレア・ペトルリック・フセイノヴィッチの絵本『いつか空のうえて』の日本での初翻訳出版を記念し、展覧会を開催します。

Plavo Nebo(青い空)が原題の『いつか空のうえて』(図1・2・3)は、フセイノヴィッチが初めて絵、文ともに手がけた絵本です。ひとりの少女が、高い塔の窓から青い空と雲の間を、亡くなった母親を探そうとする物語。フセイノヴィッチ自身、10歳で両親を事故で亡くすという経験を持っています。この作品は、自身の悲しみとともに、「絵のなかには、子ども時代の母親との幸せな思い出を描いている」と画家が語るとおり、母

親への愛に満ちています。同時に、すべての子どもが愛情に包まれ、幸せな子ども時代を過ごしてほしい、という願いも込められています。

フセイノヴィッチは、幼い頃、画家だった母親の書庫で見たマグリットのシュールレアリズム*の作品に非常に興味を持ったと語っています。母娘の思い出につながる象やかめなど、さまざまな生き物が空に浮かぶ『いつか空のうえて』は、現実にはありえないものを空に描いたマグリットの世界に通じます。

フセイノヴィッチの作品は、その色づかいも魅力です。『いつか空のうえて』は青が基調ですが、その空の色は、グレー

がかった空色から濃い青など場面ごとに異なり、ページをめくるたび、色の変化を楽しめます。またアクリル絵具を筆のタッチがわかるほど厚く塗る描法は、油彩画のようなつやを醸し出し、色彩を一層鮮やかに見せる効果があります。フセイノヴィッチは、こうした色の感覚を母親から譲り受けたものと述べています。

本展では、『不思議の国のアリス』(図4)からも作品を紹介いたします。豊かな色彩とその配色の美しさという、フセイノヴィッチの魅力が十二分に発揮された作品世界をご覧ください。(柳川あずさ)

*1920年代に生まれた芸術表現。夢(非現実)と現実が矛盾することなくひとつの世界を形作るような超現実を実現しようとした。ルネ・マグリット(1898-1967)はシュールレアリズムを代表するベルギーの画家。



図1 海とふたりの子ども 『ぼちのきたうみ』 至光社 1973年



図5 貝がらと青い帽子と少年 1969年
カレンダー 1970年版



図2 海の夕焼けと手紙をかく少女
『ぼちのきたうみ』 至光社 1973年

「ぼち おげんきですか
わたしも げんきです
ぼちは おりこうに していますか
うみは おおきい です
ひかってて きれいです ……
はやく はやくね ぼち」

『ぼちのきたうみ』より



図3 枯れたひまわりと子ども
雑誌『子どものしあわせ』
1969年10月号



図4 白い馬とりんごを持つ少年
雑誌『子どものしあわせ』
1973年10月号

●展示室4



図1



図2



図3

図1・2・3 『いつか空のうで』より
2001年

図4 『不思議の国のアリス』より
2002年



図4

〈同時開催〉

ちひろ美術館コレクションⅡ 世界の絵本画家展

世界30カ国192人による作品（2009年4月現在）のなかから、「絵本のなかの風土と暮らし」をテーマに、赤羽末吉、ジョン・バーニンガムなど、世界の画家たち31人の作品約60点を展示します。

タチャーナ・マヴリナ（ロシア）
『タルルーシキ タラルーシキ』より1971年



「出版記念展 ちひろと一茶」(展示期間：2009年3月1日～5月12日)関連企画

「ちひろの絵で一句。」俳句募集 結果発表

主催：安曇野ちひろ美術館 後援：長野県教育委員会、(社)信濃教育会

選者：飯島ユキ(俳人・俳句「羅」(ra)の会代表)
小林豊雄(一茶記念館館長)
松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)

「出版記念展 ちひろと一茶」関連企画として、ちひろの絵8点のなかから好きなものを選び、感じたことを自由にふくらませて俳句を詠む催しが開催されました。全国から703句が集まり、6月13日には安曇野ちひろ美術館で表彰式がとりおこなわれました。各選者の選んだ特選6句を、ちひろの絵とあわせてご紹介します。(屋代亜由・川口恵子)

【総評】3歳から80歳代まで幅広い年齢層の方から応募があり、ちひろさんの絵が多くの人に愛されていることを改めて実感しました。また、どの句からも、自然や人に対するあたたかい眼差しを感じることが出来ました。これも、ちひろさんの絵が私たちの心をやさしくしてくれるからでしょう。絵から俳句を作るといふこと、なかなか難しかったという声もありましたが、佳句に恵まれ楽しく選句をさせて頂きました。(飯島ユキ)

飯島ユキ賞



春の野原 1972年

春の野に果報と知らず齢かさね
長野県松本市 森重子



夏の草むら 1973年

梅雨明けて緑の草がせのびする
長野県 牟礼東小学校6年
原田幸実

小林豊雄賞



海辺の小鳥 1972年

夏の海今飛びたとう大空へ
長野県 牟礼東小学校6年
原田壮矢



緑の風のなかの少女 1972年

けがれなき瞳と心夏帽子
長野県松本市 青木志げみ

松本猛賞



藤の花と子ども 1970年

のぞきこむひとみに垂るる藤のふさ
和歌山県橋本市 中富真弓



やぎと男の子 1969年

あたたかなひかりのなかでこあいさつ
長野県 鉢盛中学校1年
田中佑実

【佳作】

森岡宏子(大阪府枚方市)・征矢野敬一(長野県松本市)・岡倉美月(長野県松川中学校1年)・市川和代(長野県安曇野市)・宮沢理衣(埼玉県さいたま市)・奥原史佳(長野県木祖中学校3年)

※選評やその他の入選作は、安曇野ちひろ美術館HPにてご覧いただけます。

韓国・ソウル「日本の絵本の歴史展」報告 ●ソウル国際ブックフェア 2009年5月13日(水)～5月17日(日)

毎年春に開催されるソウル国際ブックフェアは、例年20万人以上の入場者があり、約30カ国から出版社・団体が集う文化的な催し物です。今年も、ブックフェアの主賓国に日本が選ばれました。「読書がつなぐ日韓の心」と題された日本年では、日本の出展者による共同のブースが生まれ、書籍・雑誌2900点が展示されました。ちひろ美術館は、日本書籍出版協会と共催で、日本の絵本の歴史資料30点を、複製を含めて出展しました。「手描き本の時代」、「版本の時代」、「子どものための絵本の時代」と3時代に区分して、資料を展示し、日本の絵本の歩みを紹介するパンフレットも韓国語で作成、配布しました。

会場には、親子連れや若者も多く、江戸時代の絵入り本の鮮やかさに驚く人や、絵巻物に描かれた竜に、韓国との共

通点を見る人など、質問も含め、さまざまな反応がありました。

ブックフェアの後、5月20日～6月20日まで、市内にある国際交流基金ソウル日本文化センター内にて、この「日本の絵本の歴史」展を、さらに展示点数を増やして開催。鳥獣戯画や、おもちゃ絵、大正時代の絵雑誌などを解説とともに紹介しました。また、展示室の別のコーナーでは、いわさきちひろの代表作をピエゾグラフ作品で紹介、韓国で出版されている日本の絵本を自由に読める空間もつくられました。オープニングでは、安曇野ちひろ美術館副館長の竹迫祐子が、ブックフェアでも行なった講演「日本の絵本の歴史—絵巻から黄金時代の絵雑誌『コドモノクニ』まで」を行い、絵本画家や図書館関係者、出版・マスコミ関係者ら70名近くが参加しました。

この展示を見た、今年4月30日に開館したばかりのソウルのソンプ子ども図書館からは、同館で展示したいといううれしい申し出もあり、新たな交流が生まれました。

ちひろ美術館のコレクションの柱のひとつである絵本の歴史資料が、国外で相互の絵本文化の理解の深まりにつながっていくことが期待されます。(松方路子)



ブックフェア会場での展示風景

ちひろを 訪ねる旅③

東京・麹町
三井コレクション



上高地の帝国ホテルにて 1942年

「ああ三井コレクション／ピサロ、モネ、ボナール／ルオーのかわいい女達が／せつなく赤いライトにおどる／焼けてしまったあのローランサンの赤い額と／ゴッホの燃えている木と草／私の夢は寂しく駆ける」

1945年の秋、疎開先の松本で、いわさきちひろは「草穂」と題したノートの中かで、東京での暮らしを懐かしみ、こう書いています。ちひろがいう「三井コレクション」とは、戦前の財閥、三井十一家のひとつ、室町三井の三井高精が蒐集した西洋画コレクションのことです。高精は、1940年、一切の事業から身を引いて、隠居。麹町の自宅敷地に公開ギャラリーを作り、

その作品を展示、毎週土曜日には一般にも公開しました。

高精は、ロンドン留学以来の友人、画家の白瀧幾之助の協力を得て、およそ200点の西洋画のコレクションを形成したと言われます。その中心は、白瀧を含め、黒田清輝、岡田三郎助、和田英作等々の帝展系の日本人画家たちの作品でしたが、コロ、マネ、モネ、ピサロ、ミレー、ルオー、マティス、ドガといったヨーロッパの画家たちの作品も含まれていました。

ちひろが「草穂」に書いた作品を麹町で鑑賞したのは、同コレクションの公開が始まる1940年以降、戦局悪化で閉鎖を余儀なくされる44年までの間。ちひろ自身も、

44年4月には中国東北部殺利の女子義勇隊訓練所に渡りますから、わずか3年余のことでした。この時期、ちひろは40年に先の夫を自殺という形で失い、中国・大連から帰国、藤原行成流の書の師範代をしながら過ごしていました。それは、ちひろにとって、再生の日々だったとも言えます。実際、ちひろに書を習っていた娘のひとり、穂やかで優しいちひろのなかに、触れてはならない哀しみがあることを感じていたと言います。

敗戦を経て、自らの人生を問い直すちひろに、かつて出会った画家たちの作品は、再び、ちひろの内なる再生に影響していきました。(竹迫祐子)

ひとこと ふたこと みこと

5月10日(日)

母の誕生日に、母の大好きなちひろ美術館へ。優しく、またどことなく悲しみの色が表現されている数々のすばらしい絵。ありがとうございます。

5月16日(土)

京都より、年に一度は来ています。日々の忙しさからの疲れがとれます。無事に来られた幸せも湧いてきます。11月に結婚して2人で来られました。ありがとうございます。

5月30日(土)

なぜか胸がいっぱいになります。本当はもっとこの空気を吸ってみたいのに、いつも胸がいっぱいになってしまいます。ちひろの絵は、幼い頃の自分をダイレクトに引き出してしまうのでしょうか。

まだ大して(この美術館に来て)時が経っていないのに、金魚のようにアップアップしてしまいます。なつかしさ、やさしさだけではない感情の流れに、いつもとまどってしまいますが、また来年もこの季節に来てしまうような気がします。お昼寝ベンチでゆらりと過ごしてくれている夫に感謝。レタス色の空気に満ちたこの地に感謝。緑をさらにあざやかにしてくれた雨にも感謝。ああ、ちひろには雨が似合う。(石川県 すん)

6月1日(月)

はじめてのひとり旅を全く迷うことなくちひろ美術館に決めました。大正解の選択でした。心洗われる景色。やさしい絵。強い平和への祈り。生きていることに感謝です。(紀久子)

6月13日(土)

大人になるということは、自分以外の人を愛せるようになること。自分は大人になれているかな？ 成長できているかな？ 自分もだけれど、人を大切にしようここにきて思いました。ちひろさん、スタッフの皆さん、ありがとう。(まさこ)

6月16日(火)

久しぶりに野辺山より足を運びました。2007年11月に夫を亡くし、少し気持ちも静まってきたこの頃、埼玉より訪ねてくれた79歳の姉と二匹の犬をともなつての再来です。夫と訪ねたこの地に来られたことを思い出し、涙が止まりません。ここに來られて、また元気をもらって帰ります。(小学生時代を大町で過ごした姉妹)



美術館 日記

4月19日(日)☀

今日は13回目の開館記念日。記念プレゼントである「りんごの天使」の絵葉書に、「可愛いですね!」「いい日に来たわ」と来館のお客様もうれしそう。「おめでとうございます!」とたくさん声をかけていただき、14年目となるこの1年も、多くの方楽しんでいただける美術館にしたいと気を引き締める。

4月28日～5月22日

ハノイの国際交流基金ベトナム日本文化交流センターで、いわさきちひろ絵本展を開催。ピエゾグラフィ作品と絵本を展示した。初日には、ベトナムの若手絵本画家タ・ヒ・ローン氏と当館副館長とのトークセッションが行われ、日越の絵本の歴史や絵本づくりの工夫、絵本の未来について話し合った。

期間中430の方が来場され、会場でのアンケートには、「世界のどの子どもにも、笑顔や目線、悲しい顔など、同じところがある」といった感想が寄せられた。

5月8日(金)☺

「はらぺこあおむし」などの絵本で知られ、当館のコレクション作家でもあるエリック・カール氏が、6月25日に80歳の誕生日を迎える。姉妹館であるエリック・カール美術館から、本人には内緒でパースデーブック作成の協力依頼。「あおむし」とちひろの「赤い毛糸帽の少女」をモチーフにカードを作りお祝いの心を込めて送る。

5月27日(水)☺

長野県博物館協議会の総会が、当館を会場に開かれた。当館館長の「経済危機の中での美術館、博物

館」をテーマとした講演や、営業主任による営業活動の紹介もあり、活発に意見が交わされた。また、この春に完成した新収蔵棟の案内と、作品の額装の研修等も行われる。館運営が厳しい時代、県内の美術館、博物館が連携を強め、良い活動をしていくことが期待される。

6月15日(月)☺

松川村を含む安曇平一帯で広く唄われ、大正時代に復活した民謡「安曇節」。松川小学校の6年生がその作詞に挑戦し、ちひろの絵をうたった詩が入選した。「にじみジュワジュワ キレイいろいろだ やさしいいろいろだ ちひろの絵」というもの。ちひろの絵が、地元子どもたちにとって身近な存在であることが感じられてうれしい。



●次回展示予定 9月11日(金)～11月30日(月)

〈展示室1〉ちひろとちひろが愛した画家たち

初山滋、マリー・ローランサン、丸木位里・俊らの絵に魅了され、影響を受けながら、いわさきちひろは自らの表現を確立していきました。本展では、絵本『ゆきのひのたんじょうび』など代表作とともに、ちひろが愛した13人の画家たちの作品を紹介します。



花を持つワンピースの少女 1969年頃

〈展示室2〉ちひろの人生

〈展示室3〉世界の絵本画家展

〈展示室4〉企画展 日波国交樹立90周年記念

ポーランドの絵本原画展

ポーランドでは、社会主義時代に多くの絵本が出版され、その中から、現在も活躍を続ける絵本画家も生まれました。本展では、ユゼフ・ヴィルコンやエルジュベータ・ガウダシンスカの作品を中心に、ポーランド絵本の魅力を原画と資料で紹介いたします。



ユゼフ・ヴィルコン (ポーランド)
秋の美りの顔「地球の4人の息子たち」より 1982年

〈展示室5〉絵本の歴史

安曇野館イベント予定

各イベントの予約・お問合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
詳細・最新情報はHPからもご覧いただけます。 <http://www.chihiro.jp>
TEL 0261-62-0772 FAX 0261-62-0774

●7月28日(火)～8月17日(月)

夏休み体験コーナー「ちひろの水彩技法体験！」

10:00～16:00(受付終了15:30)

夏休み期間中、地元松川村の中学生ボランティアによるサポートのもと、子どもから大人まで楽しめるワークショップを毎日開催します。ちひろの絵の特徴でもある、水彩絵の具を用いた「にじみ」の技法を体験します。



- 会場：安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
- 申込み：不要 (混雑時は整理券を配布)

※ 8月9日(日)を除く毎日開催

〈同時開催〉中学生による絵本の読み聞かせ

松川中学校図書委員の皆さんが、絵本の読み聞かせをおこないます。

- 日時：8月2日(日)・4日(火)・7日(金)・11日(火)
14:00～/15:30～
- 会場：安曇野ちひろ美術館 絵本の部屋
- 申込み：不要

●8月8日(土)、9日(日)

安曇野アートラインサマースクール

畑に集まれ！“お野菜たんけん” 始まるよ

—野菜をよーくみつめると、見えなかった何かがみえてきました
「平成21年度 文化芸術による創造のまち」支援事業
主催：2009アートライン・まつかわサマースクール実行委員会
共催：松川村、武蔵野美術大学芸術文化学科、安曇野ちひろ美術館、
安曇野アートライン推進協議会

- 会場：松川村多目的文化センター すずの音ホール、松川村内各所
- 対象：どなたでも
- 定員：40名 ※定員になり次第締切
- 参加費：1500円 ※家族参加(2名以上)の場合は1名1300円
- 申込み：要申込み。

TEL・FAX・メール(chihiroa@seagreen.ocn.ne.jp)・ちひろ美術館HP・往復はがき(住所、氏名、年齢、連絡先を記入)にて受付。宛先は安曇野ちひろ美術館「サマースクール係」まで。 7月31日(金)申込み締切

●8月21日(金)、22日(土)

夕暮れミュージアム 21:00まで開館

浴衣を着てご来館いただいたお客様には、1ドリンクサービスいたします。また、19:30からは、中庭にて「夏の夜のおはなしの会」を開催します。

撮影：橋本裕貴



●他館での展示スケジュール ※詳細は、各館にお問合わせください。

- 損保ジャパン東郷青児美術館(東京・新宿) 7月11日(土)～8月30日(日)
ちひろ美術館コレクション ミリオンセラーの絵本原画と世界の絵本画家たち お問合わせ:03-5777-8600(ハローダイヤル)
- 平塚市美術館(神奈川) 7月18日(土)～8月30日(日) わたしがえらんだ いわさきちひろ展 お問合わせ:0463-35-2111
- 刈谷市美術館(愛知) 9月19日(土)～10月25日(日) わたしが選んだ いわさきちひろ展 お問合わせ:0566-23-1636

●夏季開館延長のお知らせ

お知らせ

8月中は無休。期間中、18:00まで開館を延長します。

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日 11:00～
絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみいただけます。どなたでも自由にご参加いただけます。

●絵本相談室

毎月第2・4土曜日 11:30～
絵本に関する相談や絵本選びのアドバイス等、絵本に関するお問合わせを承ります。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日
14:00～ ちひろ展/14:30～ 世界の絵本画家展
展示室にて、作品の解説や展示の見どころ、絵の楽しみ方などをお話します。

CONTENTS

- 〈展示紹介〉ちひろの四季/出版記念 アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチ展…②③
- 〈活動報告〉「ちひろの絵で一句。」俳句募集 結果発表/韓国・ソウル「日本の絵本の歴史展」報告…④
- ちひろを訪ねる旅⑧/ひとことふたことみこと/美術館日記…⑥

美術館だより No.57 発行2009年7月10日

●安曇野ちひろ美術館